

猪犬と登る猪猟の頂点へ 猪猟の上級編 ① 田宮 治

悲願の頂点

悲願十年というけれど、五十五年もの年月を費やして、誰にも負けない失敗と挫折を繰り返しながら何度も登り、慣れ親しんできた猪猟の頂点までの道程であった。

だが、今回の頂点までの道案内は、人様を教え導くという壮大な目標があり、この二年間の道案内は大変なものであった。何もかもが、愛犬たちと登り、極めてきたこれまでの道順とは一味も二味も異なった、恐ろしいまでの体験である。

悲願とは、私が衆生を救おうとしてたてた誓願であるが、仏様でない私ごときが、こともあろうに若者たちを引き連れて、猪猟の頂点に立ちたいという悲願（ぜひとも成し遂げたい願い）をぶち上げ

たのだから、必ず達成して喜び合いたいと思う。

しかし、この難関を越えるのはなかなか大変で、並の手法や頑張りだけでは越えられることではない。それでも決心したからには、絶対に夢の頂点に立たせる万全の対策を立てて作り上げた、一流猪犬群と頂点までの大道を上手に使い、確実に登り立つ以外にはないである。

頂点に登る過程で実践する手段は、目的達成の大事な決め手となるので、独断や偏見でも構わないが、自分でやってきた猪猟体験から得た道順で登る猪猟法が一番良く、この道以外では頂点にたどり着けない、と信じて疑わない。いつも登って来た、慣れ親しんでいる猪猟道を思い切り押し出して上手に使い、登り切ることなのである。

そして、登り詰める大道や道順と手法については、あくまでも極めようとすむ若者たちの能力と、その成長に合わせて順次選びながら、示すことが肝心である。

なかでも特に重要なのが、使う道順である。近道に乗せて一気に突進するか、少し遠回りしてでも大事な場面では確実に体験させて覚えてもらうか、成長に合わせ順次ハードルを上げて挑戦させるかは、大事な意味を持つことなのである。

その時々打つ手段は、必ず登り慣れて何もかも知り尽くしている案内人が選び出して、適時実践で示し、根気よく教えることなのである。

すべての道が人それぞれの猪猟の中にあって、私がこだわっている猪猟の上達法は、何度でも繰り返すことで、できなかった課題を

乗り越えて、必ずできるようにすることなのである。

この重要なポイントを上級編の集大成の意味で要約すると、猪犬と猪猟法の上達手段をくどいほど実践に乗せて発信してきた「猪犬と登る猪猟の頂点へ」の中にいつも出てくる実践での体験と、その体験の繰り返しなのである。この二つの連係プレーこそが、上達の要であり、私の目指してきた信念である。

確かに、猪猟の極致を伝えるからには、安全・安心で、発信する項目のすべてを分かっていたらいい。だが、その分かっていただけけるものは、猪猟の目に見える比較的簡単なことだけだと思ふ。

ここで知ってほしい私の本当の願いは、当然、猪猟の頂点に立つことである。極めてもらいたい猪猟の奥に秘められた、目に見えない極意の数々をできる限り目に見える実践の場に引きずり出し、体験を通して分かってほしかったのである。

その最たる重要事項ができない場合、何度でも繰り返し、努力し、

鍛錬することで必ずできるようになる超具体的な方法である。

猪猟のエキスパート（達人）とあって頂点に堂々と立つためには、猪猟で苦勞して会得した実戦での体験を、これぞと思う至難の一戦に丸ごとスッポリ被せる（感覚）ことで、実際に戦ってみる。

そして、その戦いの内容を精査し検証して、良い点と悪い点をしっかりと洗い出して、良いところを次の戦いに生かすのである。

また、これまでの一戦ごとの英知を結集して、順次戦いのレベルを高めて、次の一戦に繋げるのである。つまり、実戦の繰り返しは何よりも大事な上達の近道である、と何度も言い続けてきた。

さらなる注目点は、この実践方法でやり抜くことが、猪猟の完成ばかりでなく、猪犬作りや犬芸仕上げになり、猪との戦いに完勝する対策や準備までもが、全く同じ上達の原理なのである。

特に私が押し出す「俺流の猪猟」では、そのすべてが猪犬群の一流芸にかかっている、との信念である。この道理に基づき、訓練

を繰り返して、日本一の猪犬を目指して挑戦を続けてきたのである。

気の遠くなるような長い年月をかけ、仔犬作りから始まり、大切に育てて、自分の猟法に合った猪犬仕上げとなるのだが、この訓練の実態も俺流が基本である。

私が長い体験で編み出した猪犬完成の秘策は、何でもない、誰にでもできる簡単なものなのである。

仔犬が生まれ、まだ目のあかいうちから言葉で話し、撫で回すことから始め、生後三カ月くらいからは私が大切に行っている綱引きの基本訓練が始まる。

雨が降ろうと雪が降ろうと一日も休まず、全身全霊でただ一本の綱に懸けて、猟場に出た時に絶対に必要な主人との間（距離）の取り方や、緊急時の命令を言葉で話せばと犬たちがすぐ反応するまで徹底的に教えるのである。

そこまで繰り返し綱を持って訓練しておけば、どんな実戦でも、引き綱を一本も使わずに車から放犬して、すべてを犬たちに任せ、安全・安心の思いどおりの猪

猟ができるのである。

待ったなしの真剣勝負

何事であっても、その完成や達成するためには、誰にでもできる簡単な基本を毎日欠かさず、繰り返しやり通すことである。特に忘れてはならない大切なことは、目的意識を持って何十年もやり通すことである。

ここまでやり続けた時点ではっきり見えてくる、この誰にでもできる簡単な訓練は、全く異なる特別な極意を追究する苦難の鍛錬へと進化する。その先は、誰にでも

できない極致の訓練の連続となるのである。

当然、この誰にもできない困難な訓練を頑張って乗り越えるのが本当の訓練であるが、これを諦めて並の猪猟人で終わるか、頑張っ

て突破して名犬や達人に見事登り詰めるかは、まさに押し進める当事者の根性にかかっている。

要するに猪猟や猪犬の世界は、負けたら終わりの、待ったなしの真剣勝負なのである。

私はそんな信念で猪猟を分析して、独断で諸々のことを説明してきた。そのすべては戦いに勝って喜んでいただくためであり、この素晴らしい猪猟を次世代に繋げてほしいからである。

つまり、今日の戦いは必ず勝つて、犬たちの一流芸と戦いの凄さを証明することで、私の作った猪犬群の仕上がり具合を分かっていたきたいのである。

そんなことをあれこれ考えながら、もう十分にもなるというのに、どっかり腰かけたままである。

犬群は大きく回り、またあの篠竹の大藪に突入したが、今度は止めることもなく同じコースをたどる様子である。「よし来た！ 今度こそは」と気合いを入れて立ち上がった。この峰を戻るように走れば、猪と突き当たる感じになる。

汗もひき、足取りも軽く、いつでも迎え撃てる態勢で先ほど通り抜けて来た大杉林の中にある孟宗竹藪を指して急いでいた。

GPSを見ると、朝、猪を追っ

見渡すと、この大峰が一番高い頂なのに、連絡が取れないのでは仕方がない。

これから先の猟場は、私が一度も踏み入ったことのない未知の場所である。

未知の猟場にぶち当たった時でも、焦らず慌てず、堂々と戦い抜く若者たちになってもらいたい。私が独断で立案したこの一戦も、とうとう至難を乗り越えて、限界に挑戦する絶好の見せ場がきたようである。

私が今戦っている「鎖の一戦」で示してやりたい存念は、まさに克服や達成が至難となるここからの戦い方であり、必ず勝つべく、限界時に本気で押し出す猟法である。

ところで、もう二時間も追いつけ、攻めまくっているというのに、まだこの有り様である。この止め現場で決めてやらないことは、犬たちだってそろそろ限界に近い。

一流猪止め犬の最高の組み合わせであっても、本来が猪止め犬であれば、一時間くらいを限度に、

どんな戦いでも決着をつけてやらなければ一流止め芸の維持はできないし、さらなる極致への成長も望めないのである。

いくら特別であっても、猪止め犬に対して猪を追わせ続ける邪道は無理してやり続けられれば、追い犬になり下がってしまうのは当たり前

前のことである。私はすぐにでも飛び下りて行き、一発で決めてやりたい。

そんな一刻を争う緊迫した猪止め現場を目前にしながら、主役の北嶋氏が駆けつけるのを待ち侘びていた。

首に掛けたタオルで汗をぬぐ

い、立ったままで缶コーヒを飲みながら、切羽詰まった状況の中で、現実の厳しさと眼下の絶景を照らし合わせて、自問自答していた。

「取れますか、どうぞ」

相変わらず返事はない。絶景の山裾に箱庭のようなマッチ箱の家が二軒と田んぼと畑。快晴の空のもと、二、三、くらい先の山並みまで、猪止め現場はまるで一枚の絵画のように美しい。



千葉での激戦。真竹藪の戦いは「凄い」の一言で、この中でバリ、バリ、ワン、ワン、グオーツ、グオーツである。まさに命を懸けた戦いである



千葉の杉林の中。下草があつて猪を止めても、犬も猪人も攻めるのに苦労する。こんな中で止めは、近寄ると猪は必ず一気に突っ走って逃げるので要注意である

眼下に見える車道からわずか一〇〇メートル登った、田んぼのすく上に広がる真竹の大藪である。連絡は取れないが、北嶋氏だって必死で犬たちを追っているに違いない。

あの道からだ二度とない絶好のチャンスなのに……と、やきもきしながら、今日の目的である北嶋氏との約束を最優先に、立ち尽くしたまま見守っていた。その間に動かなかった止め現場が少しずつ下にずり落ちて、何と猪は田んぼの中を突き抜けて道まで越えて、さらにその先の大山に逃げ込んでしまったのだ。

こうなったら、期待してのんきに待っている状況ではない。一気に猪を追い出せば藪続きで迷子になる恐れがある。私はそうならぬように、この絶景を瞬時に頭に叩き込み、犬たちが立ち去った止め現場から猪の逃げ込んだ大山までの最短距離を、馬の背状に続く尾根を駆け出したのである。

「何くそ！ これしきのことでは、負けてたまるか」と気合いを入れ

人間誰もが、こんな危機的状況の中で絶対に勝ちに繋げるものは、体験で得た技術と体力は無論のこと、何がなんでもやり抜く根性であり、気構えである。

的確に二本目の出峰を飛び下りて止め現場の真竹藪に分け入ると、その中はやっぱり恐ろしい所で、身動きもままならない。枯れた竹の山で、小沢の流れをせき止めた竹と瓦礫の小山を挟んで、犬たちと猪が攻防してかきむしった跡が、まるで土俵のように生々しく残っていた。

マロ号たちの止め芸をもってしても、あの篠竹の大藪以上に難しく、猪が攻撃して来ない限りまずもって止め切れない。

よしよし、この戦いで猪もそうとう疲れたようで、咬み込まれる寸前ようだ。ちなみに、わが山彦犬舎の一軍犬十一頭ならば、猪が攻撃して来ればしめたもので、一〇〇メートル止め切る実力は持っている。

当然、今日連れて来た七頭は、その一軍犬たちの中でも特にこたわって、確実な止め芸にプラスし

た素晴らしい追い芸を鍛え上げ、どんな難戦でも絶対に勝ちに繋げる万全な備えをしてきた犬たちである。

私はここが俺流の押しどころと思ひ、向かいの大山を一気に越えるため気合いを入れて田んぼの畦道から車道を通き切り、必死で犬たちと猪跡を追い続けた。やっとたどり着いた頂は驚きの別天地で、頂上付近の樹木はきれいに切り倒され、畑が作られていた。

その周りには猪や鹿除けのネットが張られ、中央に小屋風の別荘があるではないか。私は急いで銃を銃袋で被い、外から「こんにちは、どなたかおられますか」と大声で呼びかけたが返事がない。

仕方なく「失礼しますよ」と言いながら、その家の横から山裾に続いている細い階段状の小道を駆け下り、小沢と並行する車道に出た。

頂上から小道を飛び下りたので、犬たちに少しは近づいただろうと思つてGPSを見ると、犬たちはさらに道路と小沢の向こうの大山を越えたらしく、GPSの画

面には「？」マークが出ています。犬たちの居場所は、この大山を越えた先のようにだ。「この山も越すのかよ……」と、GPSを見ながら回り込めないものかと、右下方向に道を歩き出した。車も人もない山間の道を十分くらい進んだ所で、前から一台の軽トラックがスピードを上げて近づいて来た。

北嶋氏である。彼は私が下りた山裾辺りに犬たちがいると思つて、この道に入って来たとのことだ。彼と今までの状況について話し合い、その結果、大回りになるようだが、すっかり離されてしまった犬たちの所に車で急行することにした。

GPSを頼りに軽トラックで二人とも全く知らない農道に分け入り、そのドン詰まりで車を止めた。そこは小道の両側に大山がある大きな谷間で、車を止めた所まで細長く田畑が続いている。

その奥の峰にはゴルフ場のネットが見える。行き止まりだが、車から一〇〇メートルの所から右上に向かって小沢が上っており、大

山の峰が奥まで続いているようだ。

犬たちは、その小沢の入り口から広がる大杉林の中にいるが、もう鳴いてはいない。左側の大山を越えて車を止めたこの小道を走り、大杉林に入ったようである。

二人で近寄ると、GPSが示すとおり、マロ号の赤い姿が、杉林の上を小沢の奥から、さっき入ってきた小沢の入り口方向に走るのが見えた。

北嶋氏がすかさず杉林に入ると、マロ号たちを追っかけようとしたので、私は「駄目だ、戻れ！」と止めて、急いで車の所へ戻った。

ここが最後の勝負どころと見たので、北嶋氏に「ここに残れ。そして、あの大杉林の小沢を中心に移動タツを張るのだぞ！必ず俺が猪の先回りして追い戻し、あの小沢に追い詰めるからな」と一方的に言い残して、小道を三〇〇メートルくらい戻り、犬たちが追う先を横切っている小峰伝いに大山の頂上に向かって登り始めた。

驚いたことに、その小峰も入り

口の畑も猪の掘り跡だらけで、寝屋跡まである。この猪は、この辺

りで生まれ育ったものかもしれない。だからマロ号たちの執拗な追跡で、こんなに遠くまで一気に逃げ込んだに違いない。

絶対に猪の行く手を断つ覚悟で、汗をタオルでぬぐいながら、やっと小峰の程まで登った時、ヨシ号とシロ号が私のすぐ上に現れた。

ところが、マロ号の姿がない。マロ号がいないということは、猪を見失って別々に探している最中のようだ。

マロ号たち止め犬群の追い方は、猪の足跡を確実に追うのではない。あくまで咬み止めるために、直線的に先回りしたり、実戦の体験から猪の体臭を頼りに見込み追いをしたりするので、犬たちの止め芸が一流になればなるほど、追う途中で見失うことが多くなるのである。

猪の足臭で確実に追い切る追い犬が見失った場合は、その近くに猪がいることはほとんどない。しかし、猪止め群が見失った時は、

猪が必ずその近くの藪中に潜んでいることが多い。

ここが大事な勝負どころなのである。

実際に私と共猟したベテランの友人さえも、「犬たちが猪を見失って、ウロウロしている」と言ってくるのが常である。当然、そんな時の私の決まり文句は、「静かにその場で待て」「猪が近くに必ずいる」「必ずまた鳴き出すから、落ち着いて寄り付き、撃て」である。

なかでも面白いタツの言い訳は、「犬たちが吹っ飛んで来たので驚いて見送ったら、その後で犬猪が飛んで来た。あれは犬たちが追ったものではない」というものである。

これなどは咬み止め犬の最たる技で、逃げる猪を先回りして一気に咬み止めに出来る、素晴らしい速攻なのである。

だから、ここがいよいよ勝負時と思ひ、いつものように大声で「ヨシ、シロ、来い、来い。ジジだぞ！」と名前を呼び、来るように命じた。

こんな大事な時に、簡単な主人の言葉ぐらひはきっちり分かって、すぐに反応するのも一流犬のもシロ号も、思わぬ私との出会いにうれしそうに飛んで来た。

「よし！よし」と何度も無で回しながら、「マロはどこだ？猪はどこだ？」と話しかけていた。

ヨシ号たちは「分かったよ、ジジ。猪はこっちだ」というように出て来た方向にUターンして、北嶋氏の待っている小沢の周りを目指して飛んで行った。その後ろ姿を見送りながら大声で「頑張れ！ジジも行くぞ」と怒鳴っていた。

やはり猪は、私が張っている防御内に必ず潜んでいると確信し、猪の逃げ道を断ち切るために小峰を登り詰めた。北嶋氏の待つ小沢の上まで長く続く大山の大峰筋までグルッと回り込み、今度こそは絶対に猪が越えられない完璧な防御を張り巡らす勢子役に徹すべく、改めて覚悟を決めていた。

(つづく)